2G-07

情報科指導法におけるオンライン模擬授業の試み

中園　長新†

東京福祉大学　教育学部†

１．はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により，2020（令和 2）年度（以下，本年度）の大学における講義は，その多くがオンライン授業に移行した．教職課程の教科指導法に属する科目は一般に受講生による模擬授業を取り入れている(1)が，講義のオンライン化により，従来のような「教師役の学生と児童生徒役の学生が同じ教室に集まり，対面模擬授業を行う」ことが困難になってしまった．そのため，オンライン環境下で模擬授業をどのように実施するかが課題となった．

本稿は，筆者が大学における教職課程科目「情報科指導法」において，オンライン環境下における模擬授業を実践した報告である．現時点ではあくまでも一つのケーススタディに過ぎないが，この実践で得られた知見を元に，様々な模擬授業実践の可能性が広がるきっかけを作ることが，本稿の目指すところである．

２．オンライン模擬授業の実践

2.1. 科目の概要

本稿で扱う実践は，東京都内の私立大学における教職科目「情報科指導法Ⅰ」（春期開講，2 単位）（以下，Ⅰ）および「情報科指導法Ⅱ」（秋期開講，2 単位）（以下，Ⅱ）における実践である．これらの科目は教育職員免許法施行規則第 5 条に定められている「教科及び教科の指導法に関する科目」のうち，高等学校情報科の「各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む．）」に対応する．本年度の履修者は全員が大学 3 年生であり，Ⅰが 6 名，Ⅱが 5 名であった．各科目で扱う主な内容を表 1 に示す．

表１　情報科指導法の主な内容

情報科指導法Ⅰ
・学習指導要領解説の精読
・情報科の教育に必要な基礎知識の習得
・模擬授業（ショートレクチャー）
情報科指導法Ⅱ
・情報科の実践事例研究
・育成したい資質・能力と年間指導計画の検討
・模擬授業（2 回）

なお，本年度はコロナ禍の影響でⅠ・Ⅱともにオンライン授業として実施している．Web 会議システム「Zoom」を利用したリアルタイム授業を行い，オンデマンド型の授業は行っていない．

2.2. 模擬授業の概要

本実践では，Ⅰ・Ⅱあわせて 3 回の模擬授業を実践した．Ⅰの模擬授業は練習としての位置付けであり，10 分程度のショートレクチャーを計画し，実際の授業を行うものである．Ⅱの模擬授業は一般的な高等学校の授業に即して，50 分授業 1 回分の学習指導案を作成して模擬授業を行う．ただし授業時数の都合により，模擬授業は授業冒頭 15 分間のみを行うこととした．

なお，本稿執筆時点において，Ⅱの模擬授業は 1 回目のみ終了し，2 回目は未実施である．そのため本稿では，ⅠのショートレクチャーとⅡの模擬授業 1 回目を対象に検討を行う．

2.3. 模擬授業のシチュエーション設定

本年度の模擬授業は，オンライン授業での実施となったため，次のようなシチュエーションを仮定して模擬授業を行うこととした．模擬授業の実施には，授業と同様に Zoom を用いた．なお，実際の受講生は教師役・生徒役ともにそれぞれの自宅から参加している．

- 教師は校内の任意の教室から授業を配信するものとし，生徒は各自の自宅から受講しているものとする．
- オンライン授業は，リアルタイム形式で，Zoom を使って行うものとする．
- 生徒はパソコンを使ってオンライン授業を受講しており，教師・生徒ともに，インターネット上のリソースは制限なく自由にアクセスできるものとする．
- Zoom のチャット，ホワイトボードや画面共有等の各種機能を利用してもよい．

３．実践の振り返りと検討

3.1. 模擬授業実践における受講生の様子

オンライン模擬授業は教員・学生ともに初めての試みであり，試行錯誤しながら実践を行った．実際の模擬授業における学生の様子を観察

Trial of Online Mock Classes in Teaching Methodology of Information
†Nagayoshi Nakazono. Tokyo University of Social Welfare

Copyright ©2021 Information Processing Society of Japan.
All Rights Reserved.

したところ，次のような傾向が見出された．

- 教師役が一方的に講義する知識伝達型の場面では，大きな問題はみられない．
- 生徒役に発言を求める際，挙手を求める代わりに Zoom のチャット機能を活用する事例がみられた．
- 教師役・生徒役ともに，身体の姿勢や喋り方，視線等に対する意識が欠落しがちであった．
- 教師役が，生徒役の理解度を把握することに困難を感じていた．

3.2. 授業実践の観点からの検討

今回の模擬授業に参加した受講生は，他教科の指導法も含めて模擬授業の経験が少なく，多くの課題がある状態であった．その中でも，教師役が主導権を握る知識伝達型の授業場面に関しては，プレゼンテーションスライド画面の共有等を活用し，対面授業とほぼ遜色ない実践になっていた．

一方で，教師役と生徒役がコミュニケーションを取らなければならない場面においては，双方においてどのように振る舞えばよいのか困惑している様子が伺えた．特に，教師役は「どのように振る舞えば生徒に伝わるのか」，生徒役は「どのような反応をすれば自分の理解度を示せるのか」といった点で混乱が生じていた．

また，教師役においては，生徒役の発言をどのように集めるかといった問題に加えて，発言内容をどのように整理するかといった問題にも直面していた．通常の教室であれば挙手または指名で発言を求め，その内容を板書するのが一般的であるが，Zoom 越しでは生徒役が発言のタイミングを見極めることが難しく，また，教師役も発言内容をどの手段で整理すればよいかについて戸惑いがみられた．

3.3. 受講生の態度面に関する検討

模擬授業に参加する受講生の態度面に関しては，対面による模擬授業と比較して教師役・生徒役ともに緊張感が欠落していたことが見て取れた．具体的には，身体の姿勢（リラックスした体勢），喋り方（声のトーン等に意識が向いていない），視線（カメラの向こうの教師・生徒を意識できていない）等の問題が観察された．これらの原因として，次の 2 点が考えられる．

1 点目は，受講生が自宅から参加しているという点である．大学の教室と異なり，自宅は学習の場であると同時に生活の場でもある．そのため，受講生が教師や生徒という役割に，自分自身を十分に没頭させられていない様子が観察された．

2 点目は，同じ空気感を共有することの難しさである．対面の模擬授業であれば，互いの緊張感や集中の度合といった空気感を共有しやすいが，オンライン模擬授業は物理的に離れた場所で参加しているため，お互いの空気感の共有が困難である．模擬授業の中では，生徒役の理解度を教師役が把握できず，授業を進めてよいのか補足説明をすべきなのか困惑する様子が観察された．お互いの様子はカメラ越しに見えているものの，同じ授業を受けているという一体感に欠け，それが緊張感の欠落につながったと考えられる．

4．おわりに：今後の課題

本稿では，教職課程科目「情報科指導法」においてオンライン模擬授業の実践を試み，その課題点を検討した．オンライン模擬授業は知識伝達型の授業は実施しやすいが，主体的・対話的で深い学びを実践するためには多くの困難を伴う．また，板書や生徒の発言をどのように扱うかといった点において，対面授業とは異なる準備や指導が必要となることが見出された．

指導法の科目における模擬授業は，本来は実際の学校現場に準拠した対面での実施が求められるであろう．しかし，コロナ禍で大学における教育活動が制限されている状況において，オンライン模擬授業であっても可能な限り教育効果を高めることで，ベストではなくともベターな教育が成り立つと考えられる．また，初等中等教育においても今後オンライン授業が取り入れられる可能性もあり，本研究はそうした時代への対応も見越している．今後は本実践の課題に加えて，他の実践報告等[(2)]の知見も踏まえながら，課題を解決し，よりよい模擬授業を実践するために，授業担当教員としてどのような配慮や指導が必要かを検討する必要がある．

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP17K14048 の助成を受けたものです．

参考文献

(1) 久野靖，辰己丈夫監修（2016）『情報科指導法』改訂 3 版，オーム社．
(2) 三浦和美（2020）「教育コラム：あたかも 1 つの教室にいるような学びをめざして―「社会科の指導法」の実践―」東北福祉大学．https://www.tfu.ac.jp/education/fe/s9n3gg000000wh4y.html （2020-12-09 閲覧）

Copyright ©2021 Information Processing Society of Japan.
All Rights Reserved.